

子供というものはなんて無力な存在なんだろう。突然、父と母が離婚することになり、あたしはそのことを思い知らされた。

離婚の原因は父の浮気だったから、当然のようにあたしの親権は母親のものとなった。そのことについては特に異存はない。というよりも、父の女癖の悪さは一生直りそうにないものだったから、母は離婚してよかった、とさえ思っている。

しかしその結果、東京の吉祥寺から母の実家がある尾道に引っ越さなければいけなくなったことについては、ちよつと不満がある。いや、ちよつと、どころではなかった。ものすごく、不満があった。

あたしにだって、十七年間東京で生きてきたなりのささやかな人間関係というものがあつた。それを突然切り捨てることは簡単には出来ない。

高校は別に転校したってかまわない。親友と呼べるようなひとはひとりもいなかったから。

でも、あたしにはバンドがあつた。十五の時からやっている、全員女のハードロックバンドだ。あたし以外のメンバーはすべて年上で、みな、大学生かフリーターだった。ちなみにあたしのパートはリードボーカルで、曲はすべてオリジナルを演<sup>や</sup>る。

月に一度か二度はライブハウスに出演し、インディーズだけれどCDも一枚出しているから、それなりに評価されているバンドだと言つてもいいのではないだろうか。客の入りも、最近ではようやく自分たちでノルマのチケットを捌かなくてもいい程度のもになってきていた。要するに、ちよつと地道なバンド活動が軌道に乗りはじめていたところだった。

そんな時にボーカルが辞める、というのは、どう考えてもありえない話だった。実際、家庭の事情で引越すからバンドを抜ける、とみんなに言った時には、一悶着あった。「だから高校生なんか入れたくなかったのよ」とまであるメンバーからは言われた。むろん、あたしとしては遊びでバンドをやっているつもりはまったくなかったが、それでも、その場では何も言い返すことが出来なかった。

家に帰り、一応、「高校を辞めて東京で一人暮らししたい」と母に頼んでみたけれど、それはやはり認められることではなかった。社交性のないあたしにバイト生活なんか務まるはずがない、と思われたのだろうし（実際その通りなのだが）、それ以上に母としては、自分ひとり尾道に帰り、娘を別れた夫のいる東京に残すことが嫌だったのだろう。その気持ちはわからなくもない。しかしあたしがこの時に感じたのは、親がいないと何も出来ないという、なんと情けない今の自分の無力さだった。

結局、それからあたしは尾道の高校の転入試験を受け、バンドを辞めて、母と一緒に東京を離れた。そして半年——いまだにあたしは、この海が見える美しい坂の町になじめないでいる。

学校に居場所がない、という意味では、東京の高校も尾道の高校もさほど変わりはない。副委員長の風間さんという女の子が時々話しかけてくれることもあったが、それも学級委員の仕事のうち、と彼女は考えているのかも知れない。いや、それはあたしの性格がねじ曲がっているからそう感じるだけだろう。

風間さんも、担任の先生も、いま一緒に暮らしている祖母も母も、みな、あたしに優しくかった。最初はそれが同情ゆえの優しさかと勘違いしていた。でも、どうやらそうではなく、それがこの町のひとびとがみな持っている昔ながらの温かさだということによく気がついたのは、尾道に引越してきてから二、三ヶ月が経つてのことだった。

かと言って、人見知りの激しい自分の性格を急に変えることは出来ない。周りのひとびとの優しさをありがたいとは思いつつも、あたしはほとんど自分の殻に閉じこもっていくようになっていった。

「だから高校生なんか入れなくなかったのよ」

ふとした拍子に、バンドを抜けた時にメンバーのひとりから言われたあの言葉が甦る。まさか笑って見送ってくれるとは思っていなかったけれど、それでも、何年も一緒に音楽をやってきた仲間に言う別れの言葉としてはかなりひどいものではないか。いや、でも、もしかしたら、あたしはそれくらい彼女たちにひどいことをしたのかも知れない。そう考えれば考えるほど、あたしはもう二度とバンドなんかやるものかと強く思うようになるのだった。

それでも、歌を歌うことはやめられなかった。あたしが夢中になれるのは音楽しかなかったし、歌うこと以上の快樂があるとも思えなかったから。

あたしは時々、誰もいない場所でひとり海を見ながら、大声で歌う。自分で書いた歌も歌うし、誰かが書いた歌も歌う。演奏なんかいらぬ。バンドなんか、いらぬ。

尾道の海から吹いてくる風はとても心地よい。その日もあたしは、気持ちのよい風を浴びながら、夕方の海岸通りのベンチに腰掛けて呑気に歌を歌っていた。

ジョン・レノンの「イマジジン」。

あまりにも有名な曲だが、あたしたちの世代はあまりビートルズに思い入れはない。というよりも、ロック自体、聴くひとはもうほとんどいない。

実は、あたしが古いロックを聴くようになったのは、母親の影響だった。母も昔、ここ尾道でパンクバンドをやっていたそう。パートはなんとドラムだったらしい。一回叩いてみてよ、と言ったことがあるが、もうだめ絶対無理、手と足がうまく動くはずがない、のだそう。

あたしはそんな母の照れた可愛い顔を思い出しながら、「イマジジン」を歌う。

想像してごらん。いつか、世界はひとつになる……。

と、その時である。ぱちぱちぱち、という拍手が突然後ろから聞こえてきて、あたしは慌てて振り向いた。

まずい。誰かに聴かれた。いまの、恥ずかしげもなく、思い切りお腹から声を出して歌いあげた本気の「イメージ」を！

ちなみにその時、あたしの後ろで拍手していたのは、これ以上はないというくらいダサイ格好をした男子だった。寝グセのついたスポーツ刈りにニキビ面、よれよれのジャージを着て、錆びたママチャリに股がっているその男の子は、なぜか不似合いなギターケースを背負っていた。

「きみ、森山香織さんだよ。二組の……」

驚いたことに、その男の子はあたしのことを知っていた。しかもどうやら、同じ高校に通う生徒らしい。最悪だ。

「そ……そうだけど、あなたは」

「俺は一組の小暮。話すのははじめてだね」

「う……うん」

あたしはまだ、小暮くんの顔をきちんと見ることが出来ない。

「歌、めっちゃめっちゃ上手だね」

「え……」

「バンドとかやってんの？」

「前はやってたけど……今は、やってない」

「ふうん……なあ、突然だけど、うちのバンドに入らない？」

「えっ」

ここでようやくあたしは小暮くんの顔を見ることが出来た。ダサイ男子、と先ほどは思ったけれど、よく見るとその瞳はとても綺麗に潤っていた。

「無理。もうバンドはやらないって決めたの」

「なんで」

「そんなのどうでもいいじゃん。小暮くんには、関係ない」

「そっか……まあ、そうだよな。だいたい今、はじめて喋ったわけだしな。けどさ、俺、森山さんの歌にほんと、感動しちゃったんだよね。とにかくこれ、聴いてみてよ。それで決めて。オーケーなら、明々後日ライブだから、ボーカル、よろしく。実はうちのバンド、ボーカル、ずっと探してんだよね」

小暮くんはそう言って半ば強引にあたしにカセットテープを渡すと、ママチャリをこいで颯爽と去って行った。それにしても——ボーカルって？明々後日ライブ？ なんのことやらわけがわからないまま、あたしはそのカセットテープのケースを開けた。中には小さな紙が折り畳まれて入っており、それには、明々後日のライブとやらで演る曲目と順番、すべての歌の歌詞などが手書きでびっしりと書き込まれていた。ライブ、というのはどうやら、日曜日に商店街主催で行う、駅前路上コンサートのことらしい。

あたしはもう一度、このテープに録音されているであろう曲のタイトルを見つめる。「ヘルプ！」「イエスタデイ」「レット・イット・ビー」そして……「イマジン」。

ベタな選曲とも言えるが、たぶん道行くひとびとに聴かせる休日の路上ライブだから、誰でも知っているような名曲を選んだのだろう。それはともかくなんという偶然——小暮くんにしてみれば、明々後日のライブで「イマジン」を演ろうと思っていたら、海岸通りでその歌を呑気に歌ってる（しかもちよっと知ってる）女の子を見かけたわけだ。それでついバンドに誘ってみた、というのもわからないではない。でも、悪いけどあたしは彼とバンドを組みたいとはまったく思わなかった。明々後日いきなりライブなんて絶対無理だし、コピーバンドにも興味はなかった。

ただ、そのあとしばらくの間あたしは、ぼんやりと海を眺めながら、そういえば彼、広島弁じゃなかったな——ということだけを考えていた。

あたしが今、母と一緒に世話になっている祖母の家は、山手の入り組んだ坂道の途中にある。昭和の中頃に建てられたという古い木造の家だが、あた

しはこの家が嫌いではない。あたしがもらった二階の部屋の窓から、遠くに綺麗な海が見えるからだ。

「ねえ、おばあちゃん、うちにカセットデッキってあったっけ？」

家に帰ったあたしは、台所で夕飯の準備をしている祖母に訊いた。

「たしか雅美のラジカセが押し入れにあったような気がするけどねえ」

雅美、というのは母の名前だ。母は今、町のスーパーのパートに出ている家にはいない。あたしは居間の奥にある押し入れをごそごとと漁ってみた。

ラジカセは、すぐに見つかった。小さくて赤い、可愛いデザインのものも古い時代の音楽を何度も何度も繰り返し聴いたのだろう。

あたしはさっそく部屋にそのラジカセを持って上がり、小暮くんにももらったテープをセットした。再生。

流れてきたのは、予想していたようなビートルズの音源ではなく、どうやら小暮くんのバンドの演奏を録ったものようだった。

（へえ……悪くないじゃん）

「レット・イット・ビー」と「イマジン」は、完コピしようとしたらピアノかキーボードが必要なはずだが、おそらくメンバーにその楽器のパートがないのだろう、小暮くんのバンドはピアノ抜きの構成で、原曲にハードなアレンジを加えて演奏していた。ドラムとベースは安定したリズムを刻み、ギターも上手い。あたしはよれよれのジャージを着た寝グセ頭の男子を少し見直した。

そんななかで、ただひとつ問題があるとすればボーカルの歌唱力だと思っただが、よく聴けばそれは、(たぶん)小暮くんの声だった。ロックのギターを弾きながら歌うのは簡単なようでいて意外と難しい。おまけに小暮くんは、メロディーと逆らうような変なカッティングで激しく弾いていたからなおさらだ。

むろん、ロックは技術ではないというのはわかっているし、彼のボーカル

は下手だが味のあるボーカル、と言えなくもなかった。だからというわけではないのだけれど、あたしは、なんとなくこのバンドの熱い演奏が好きになりつつあった。一瞬だけだったが、このバンドをバックに歌う自分の姿を想像してしまった（リズム隊の顔も知らないくせに）。

いや、だめだ！ あたしは慌ててその妄想を打ち消す。バンドなんかもう二度とごめんだと思ったばかりではないか。ビートルズは嫌いではないし、小暮くんも悪いひとじゃないとは思うけど、あたしは誰かと親しくなって、最後に傷つけられるのはもう絶対に嫌だった。

それでも翌日の金曜日、あたしは好奇心を抑え切れず、風間さんに小暮くんのことを訊いてみた。あたしから何か話しかけられるのははじめてだったせいか、風間さんはかなり驚いたようだったけれど（あと、たぶん、あたしが小暮くんのことを好きだと勘違いしてしまったみたいだけれど）、いろいろなことを教えてくれた。それでわかったのは――なかなかショッキングな話ではあった。

小暮くんはどうやら、小学生の頃までは東京にいて、両親からひどい虐待を受けていたらしい。その結果、警察や児童相談所などが間に入り、親と離れ、この尾道にある祖父の家に引き取られることになったのだという。唯一の趣味というか、心の拠り所は音楽で、バンドは中学の頃から近所のおじさんたちとやっているのだという（あの安定したりズム隊の正体はおじさんだった……）。

あたしの境遇と似ている、と言えなくもないが、そう思うのはたぶん、小暮くんに対して失礼な話だろう。彼の孤独や不幸に比べたら、あたしのそれはあまりにも、小さい。

かと言って、同情するつもりもなかった。子供に親は選べない、というのは身に沁みてわかっていたし、みな、そのなかで自分なりに生きていくしかないと思っていたから。それはたぶん、小暮くんにもわかっていることだろ

う。

そうでなければ、あんな、自分らしいギターを弾けるはずはない。彼のギターは、激しく痛い哀しみだけではなく、揺るぎない力強さや優しさを秘めていた。

次の日、あたしは風間さんから番号を聞いた小暮くんの携帯におそるおそる電話した。小暮くんは出ず、留守電になったがそのほうが実は都合がよかった。伝えるのはどちらかと言えば、気まずい内容のものだったから。あたしはバンドには入らないということ、ライブにもたぶん行かない、ということ、それを彼の留守電に吹き込んだ。

そのあと——夜おそく、小暮くんから一度電話があった。しかしあたしはそれをわざと取らなかった。

少し間を置いて、あたしは携帯の留守番メッセージを聴く。

「バンドには入らなくていい。だけど、森山さんに見せたいものがあるから、ライブには絶対来てくれよ」

小暮くんの声は、なんだかやけに真剣だった。

ライブ当日——晴れた尾道の駅前で作られた特設ステージで、地元のアマチュアバンドが次々と入れ替わり、演奏している。道行くひとびとは足を止め、屋台で買ったファーストフードを頬張りながらその演奏を楽しそうに眺めている。

あたしは本当のことを言えば、ギリギリまでここに来るのは乗り気ではなかったのだが、昨日、留守電で小暮くんが言っていた「森山さんに見せたい」というものがいったいなんなのか気になったので、結局来てしまったのだ。た。

やがて中年のフォークバンドのステージが終わり、小暮くんのバンドがセッティングをはじめた。たしかにリズム隊のふたりはおじさんだ。小暮くん

は、短い髪の毛を無理矢理ジェルで立たせて、白いジャケットを着て決めている。ちよつとピストルズのジョニー・ロットンに似てなくもない。というのは言い過ぎか。

そして——すぐにライブははじまった。驚いたのはその生で聴く演奏のクオリティの高さで、おじさんふたりが弾き出すビートはものすごく心地よかつた。小暮くんのギターもいい感じだったし、歌もそれほど悪くはない。テープで聴いた時の歌より断然いい。

あ、なるほど。と、あたしはようやくここで気がついた。小暮くんがあたしに見せたい、と言ったのは、このことか。

バンドは、いい。ライブは、いい。なぜならばそれは、自分ひとりで出来るものじゃないから。自分の欠点は、仲間が補ってくれるから。

あたしは小暮くんが弾く、「レット・イット・ビー」のギターソロに耳を傾ける。ジョージが弾くオリジナルのソロもいいけれど、それをさらに激しくアレンジした小暮くんのギターはもつともつと心に響いた。

「来いよ、森山さん。一緒に演ろうぜ」

曲が終わり、いきなり小暮くんがあたしに話しかけてきたのには驚いた。ベースとドラムのおじさんたちも、なぜか優しくあたしに微笑んで頷いている。

「え……」

ライブを観ていたお客さんたちが一斉にあたしのほうを見る。あたしは恥ずかしくて逃げ出したくなる。

「逃げちゃだめよ。わたしも久しぶりに香織の歌が聴きたいから」

そう言ったのは、なんと祖母と一緒にあたしの真後ろに立って笑っている母だった。どうしてまたここに——と思ったが、きつと買い物ついでに偶然この場に立ち寄ったのだらう。さらに遠くの座席には、風間さんやほかのクラスメイトたちがいるのも見えた。みな心配そうな顔をしてあたしを見つめている。

「あんだけ歌えりや、練習なんかいらねえだろ。ロックしようぜ、森山さん」  
　　つたく、失敗して恥をかくのはあたしなんだからね！　そう思いながらも、あたしの足は自然とステージのほうに向かっていた。小暮くんが手を伸ばし、あたしをステージへ上げる。そうか、あたしはたぶん、このままここで歌うのだろう。一度のリハもなく、はじめて顔を見たおじさんのリズム隊をバックに。でも、とあたしは横に立つ小暮くんの能天気な笑顔を見て思う。何かを信じないと歌なんか歌ってらんないよね、と。そしてその「何か」が同じバンドの仲間なら、言うことはない。

「歌詞とかうろ覚えなんだけど、いいよね」

あたしはマイクスタンドを握りしめて、言った。

「もちろん。じゃあ、行くぜ」

　小暮くんが勝手に作ったハードなギターソロで、このバンドの「イメージ」ははじまる。やがてその長いイントロが終わり、あたしは静かに歌い出す。尾道の丘の上のお城と緑が目に入ってきた。海の風がどこからか吹いてきて髪を撫でた。

　あたしは小暮くんのギターに負けないように声を張り上げる。想像してみよう。もうすぐあたしたちの世界はひとつになる、かも知れない。

(終)